

高齢者施設における園芸活動の実態調査

－作業機能障害の視点から－

三宅優紀¹・京極 真¹・小浦誠吾²

¹ 吉備国際大学 保健医療福祉学部

² 西九州大学 リハビリテーション学部

e-mail : miyake-y@kiui.ac.jp

Survey on Horticultural Activities in Elderly Facilities: Perspective of Occupational Dysfunction

Yuki MIYAKE¹, Makoto KYOUGOKU¹ and Seigo KOURA²

¹*School of Health Science and Social Welfare, Kibi International University*

²*Faculty of Rehabilitation Sciences, Nishikyushu University*

Summary

In this study, we conducted surveys on horticultural activities practiced in elder facilities, from the perspective of occupational dysfunction. A questionnaire survey was conducted in 719 elder facilities (long-term care insurance facilities and special nursing homes for the elderly) in Okayama and Hyogo Prefecture. Responses were received from 234 elder facilities, 223 of which were the subject of analysis.

Of the 223 elder facilities, 47.5% practiced horticultural activities, which lasted for less than 1 hour at irregular intervals with a small number of people. The horticultural activities in the planter, flower arrangement, and the horticultural activities in the flowerbeds had been made in a number of facilities. Also, flowers and vegetables have been used often. The activities were conducted with the cooperation of the staff, outside volunteers, and students. The effects of horticultural activities were evaluated in 47.2% of the facilities. The reasons that the elderly facilities have difficulty in horticultural activities were the person to support the activities are not enough and busy with other activities every day.

As a result of classifying the subjects in the type of occupational dysfunction, the person who applies to any kind was also the subject. Many of the elder facilities were intended for people who were occupational deprivation and occupational alienation. For the purpose of horticultural activities, most of the facilities aimed to improve occupational alienation, imbalance, deprivation, and especially occupational marginalization which was intended by more than half of them. For the effects of horticultural activities, many of the facilities were intended for people who were occupational alienation and occupational deprivation. In the future, we would like to examine the effect of horticultural activities on occupational dysfunction through a case report.

Keywords : horticultural therapy, long-term care insurance facility, occupational therapy, quality of life, special elderly nursing home
園芸療法, 介護老人保健施設, 作業療法, 生活の質, 特別養護老人ホーム

緒 言

我が国の65歳以上の高齢者人口は年々増え続け、平成27年9月には3300万人となり、総人口の26.0%を占める時代を迎えた(総務省統計局, 2016)。それに伴い、介護老人保健施設(以下、老健)は3993施設(厚生労働省, 2016)、特別養護老人ホーム(以下、特養)は7552施設(施設サービス等について, 2016)

となり、施設数、利用者数共に増えている。そのため利用者の多様化するニーズに対応するためには、施設での生活の充実が求められる(柘崎ら, 2011)。利用者は、施設という今までとは全く違った新しい生活環境で生活することで、過去に毎日行っていた家事、仕事、趣味(旅行、園芸など)などの活動をする場所がなくなるなど、身体機能の低下、意欲低下、活動の制約などを経験し、健康感や幸福感が低下し作業機能障害を経験している人もいると考える(Gary, 1999)。

作業機能障害は作業(仕事、遊び、日常生活活動、

2016年7月15日受付。2016年11月30日受理。
研究助成金：平成25年度文部科学省(知)の拠点整備事業(大学COC事業)「だれもが役割のある活いきした地域の創成」

休息)が適切にやり遂げられない状態である(京極, 2012)。作業療法士は、人々の well being を高めるために、作業機能障害に対してアプローチしていく。これは生活の中で人々が抱える困難感を捉える概念とも言い換えることができる。作業機能障害は作業不均衡、作業疎外、作業剥奪、及び作業周縁化の四つに分類でき(寺岡ら, 2013)、作業不均衡は、日々の作業バランスが崩れた状態、作業疎外は、作業に対して意味を見いだせない状態、作業剥奪は、外的要因によって作業ができない状態、作業周縁化は、多くの人が価値を認めるような作業を行えない状態である。例えば、作業不均衡は、施設内ですることがなくベッドで寝てばかりいるような状態である。作業疎外は、病気になり出来ないことが増え、気分が沈み生活全般において意欲が低下しているような状態である。作業剥奪は、施設にいるため自分にとって興味のある活動ができないような状態である。作業周縁化は、やりたいことをさせてもらえず、やりたくないことをさせられているような状態である。作業機能障害から回復する為には、「したい活動」「やるべき活動」を見つけ、日々の生活の中で焦らず、ゆっくり、新たな生活パターンができるまで繰り返し「したい活動」「やるべき活動」に取り組むことが必要である(寺岡ら, 2014)。

高齢者支援は、リハビリテーションをはじめ音楽療法(高田ら, 2014)、アニマルセラピー(横山, 2011)、園芸療法(東方ら, 2010; 増谷, 2012; 寺岡ら, 2012; 江口ら, 2013)など様々なものがある。中でも、園芸療法は、植物を介して参加者の心身の改善を期待する支援として注目され、身体・精神・免疫機能、QOLの向上など様々な側面に効果があることがわかっている。我々は、特養で2年間の園芸活動を通して、身体、精神機能などの大きな変化はないが、したいことが出来るようになった、バランスの良い生活を送るようになった等、利用者が抱える生活上の困難感は改善しており、作業機能障害の改善に、園芸活動が活用できるのではないかと考えた。しかし、作業機能障害の視点で園芸活動の実態調査を行っている報告は見当たらない(三宅ら, 2014)。

したがって本研究の目的は、高齢者施設における利用者の作業機能障害に着目し、園芸活動の実態調査を行うこととした。高齢者施設における作業機能障害に対する園芸活動の実態を整理できれば、園芸活動が作業機能障害の改善に役立てられる可能性が期待される。

材料および方法

1. 倫理的配慮

本研究は、吉備国際大学倫理審査委員会による承認を得た(承認番号13-38)。文書を送付した対象施設の介護部門の責任者に、調査の目的および方法、施

設個人は特定されないこと、研究成果の公表について文書で説明した。

2. 対象

対象は、近畿、中国地方から兵庫県、岡山県の2県を選定し、施設は老健と特養とした。研究者らの活動・教育の拠点が岡山県と兵庫県であるため、この2県を選定した。老健と特養の二つの施設を選定した理由として、豊田(2008)の研究で、園芸活動を実施している施設で圧倒的に老健が多いことと、研究者らが活動している場が特養であるためである。施設名と所在地は、公益社団法人全国老人保健施設協会(2016)および各県のホームページより(岡山県 保健福祉施設・病院等一覧, 2014; 兵庫県 高齢者施設一覧, 2014)より検索した。検索の結果、老健は212施設、特養は507施設で、計719施設を本研究の対象とした。

3. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成26年3月~4月30日であった。719施設の介護部門の責任者に対して、アンケート用紙を研究の説明書と一緒に郵送した。アンケートの回答者は、園芸活動に関わっている職種であればよいことを説明に加えた。記入した用紙は、研究者に郵送で返信してもらった。

4. 調査項目

1) 調査用紙の作成

藤田ら(2003)や松尾ら(1997)の調査を参考に、実際に園芸活動を実施している施設職員、園芸療法士、作業機能障害研究に精通している作業療法士とともに、それらを融合させアンケート用紙(第1図)を作成した。

2) 調査用紙の内容

調査内容はまず、園芸活動の実施の有無について聞いた。「実施していない」と回答した施設には、園芸活動が非実施の理由について選択肢を設け回答を得た。

「実施している」と回答した施設には、園芸活動の実施状況、内容、用いる植物、対象者、目的、効果、評価実施の有無と内容、関わるスタッフについて調査した。園芸活動の対象は作業機能障害の4種類である作業不均衡、作業疎外、作業剥奪、及び作業周縁化が評価できるように、作業機能障害の種類と評価(寺岡ら, 2013)を参考に作業機能障害研究の専門家に確認し質問文を作成した。園芸活動の目的、効果についても同様にし、作業機能障害の種類を表現できる質問文をそれぞれの種類で三つずつ作成した。また、身体症状の改善、精神症状の安定、認知症状の安定の報告(三宅ら, 2003)が多いことから作業機能障害以外の質問文としてこれら三つを追加した。効果についても同様にした。

施設での園芸活動に関するアンケート

1. あなたの施設について

1) 施設の種類はどちらですか 1. 特別養護老人ホーム 2. 老人保健施設

2) 現在施設で園芸活動を実施していますか 1. 実施している 2. 実施していません

3) 園芸活動を実施していない理由で当てはまるもの全てに○をつけてください

1. 園芸活動のための予算がない 2. 園芸活動をする場所がない

3. スタッフ数が足りない 4. 園芸活動ができる対象者がいない

5. 他の活動で毎日忙しい 6. 転倒やけがのリスクがある

7. 失敬体験により負の影響を及ぼす恐れがある 8. 用具の取り扱いの危険性がある

9. 他部門や施設から理解が得られない

● 以下は、園芸活動を「実施している」と回答した施設のみ回答

2. 園芸活動の実施状況について

1) 園芸活動を実施してどのくらいですか

1. 1年未満 2. 1～5年 3. 6～10年 4. 11～20年 5. 21年以上 6. 不明

2) 1回の園芸活動の時間ほどの程度ですか

1. 30分未満 2. 31～60分 3. 61～120分 4. 120分以上

3) 月あたりの実施頻度はどの程度ですか

1. 1回 2. 2～3回 3. 4回以上 4. 毎日 5. 不定期

4) 一度の園芸活動に参加する対象者は何名ですか

1. 個別 (1対1) 2. 2～5名 3. 6～10名

4. 11～20名 5. 21～30名 6. 31名以上

3. 園芸活動の対象・内容・植物・目的・効果・評価・支援スタッフについて

1) ここ1年間、どのようになりに園芸活動を適応しましたか。当てはまるもの全てに○をつけてください

1. 生活のバランスが崩れている人

2. 自分にとって価値のない活動しか行っていない人

1

3. 心身に問題があって楽しめる活動に取り組めていない人

4. 大切な活動をする機会がいない人

2) 3年以内に実施された園芸活動の内容について、当てはまるものに○をつけてください

	非常に よく行っ ている	かなり 行ってい る	あまり 行ってい ない	全く 行ってい ない
1. 畑での園芸作業	1	2	3	4
2. 花壇での園芸作業	1	2	3	4
3. 作業場での園芸作業	1	2	3	4
4. プランター(ボックス)を利用した園芸作業	1	2	3	4
5. 室内での園芸作業(スプラウトなど簡易栽培含む)	1	2	3	4
6. 園芸作物や収穫物を利用したクラフト作業活動(押し花、草木染め、芝人形など)	1	2	3	4
7. 園芸作物の収穫物を利用した料理活動	1	2	3	4
8. 生け花活動	1	2	3	4
9. ハーブティーのための収穫、ティー作成、飲茶などの活動	1	2	3	4
10. アロマエッセンス、アロマセラピーなど植物由来成分を活用した活動	1	2	3	4
11. 森林浴的な効用を念頭に置いたミニ旅行、ミニ散歩活動	1	2	3	4

3) 園芸活動で用いる植物について、当てはまるものに○をつけてください

	非常に よく用い ている	かなり 用いて いる	あまり 用いて いない	全く 用いて いない
1. 野菜	1	2	3	4
2. ハーブ	1	2	3	4
3. 花	1	2	3	4
4. 観葉植物	1	2	3	4
5. 果樹	1	2	3	4
6. 庭木	1	2	3	4
7. 盆栽	1	2	3	4
8. 稲・麦	1	2	3	4

4) 園芸活動を行う目的について、当てはまるものに○をつけてください

	非常に 良く あては まる	かなり あては まる	おおよ ぼあて はまら ない	全く あては まら ない
1. 身体症状を改善させるために行う	1	2	3	4
2. 認知症状を安定させるために行う	1	2	3	4

2

3. 精神状態を安定させるために行う	1	2	3	4
4. 生活のバランスを整えるために行う	1	2	3	4
5. 役割を獲得するために行う	1	2	3	4
6. 日中活動量を増やすために行う	1	2	3	4
7. 生きがいや趣味を獲得するために行う	1	2	3	4
8. 達成感を得るために行う	1	2	3	4
9. 栽培や収穫を楽しむために行う	1	2	3	4
10. 屋外の環境で活動する機会を得るために行う	1	2	3	4
11. 植物に触れる機会を提供するために行う	1	2	3	4
12. 周囲の人との会話する機会を増やすために行う	1	2	3	4
13. できることを周りに認めてもらうために行う	1	2	3	4
14. 周囲の人から関心を持ってもらうために行う	1	2	3	4
15. 周囲から感謝されるために行う	1	2	3	4

5) 参加者にはどのような効果が見られましたか。当てはまるものに○をつけてください

	非常に 良く あては まる	かなり あては まる	おおよ ぼあて はまら ない	全く あては まら ない
1. 身体症状が改善した	1	2	3	4
2. 認知症状が安定した	1	2	3	4
3. 精神状態が安定した	1	2	3	4
4. 生活のバランスが整った	1	2	3	4
5. 役割を獲得できた	1	2	3	4
6. 日中活動量が増えた	1	2	3	4
7. 生きがいや趣味を獲得できた	1	2	3	4
8. 達成感が得られた	1	2	3	4
9. 栽培や収穫を楽しめた	1	2	3	4
10. 屋外の環境で活動する機会が得られた	1	2	3	4
11. 植物に触れる機会が得られた	1	2	3	4
12. 周囲の人との会話する機会が増えた	1	2	3	4
13. できることを周囲に認めてもらった	1	2	3	4
14. 周囲の人から関心を得てもらった	1	2	3	4
15. 周囲から感謝された	1	2	3	4

3

6) 園芸活動の効果何らかの形で評価していますか。どちらかに○をつけてください

1. 評価している → 7, 9, 10.)へ 2. 評価していない → 8, 9, 10.)へ

7) 評価尺度や用いているものを記載してください

8) 「評価していない」場合、その理由について当てはまるもの全てに○をつけてください

1. 評価できるスタッフがいない 2. 評価する時間がない

3. 評価の方法がわからない 4. 実際に対象者の生活や行動に変化がみられない

5. 効果を客観的に捉えることが難しい 6. 対象者の参加が安定しない

9) 園芸活動に関わる施設内スタッフはどなたですか。当てはまるもの全てに○をつけてください

1. 作業療法士 2. 理学療法士 3. 園芸療法士 4. 介護職員 5. その他

10) 園芸活動に施設外のスタッフは関わりますか。当てはまるもの全てに○をつけてください

1. 作業療法士 2. 理学療法士 3. 園芸療法士 4. 介護職員 5. 学生

6. 地域ボランティア 7. その他 () 8. いない

4

Fig 1. Questionnaire.
第1図. アンケート用紙

5. 分析

園芸活動の内容と植物についての回答の結果の集計では、「非常によく行っている」「かなり行っている」をまとめ、「行っている」とした。園芸活動の目的と

効果についても、「非常に良く当てはまる」「かなり当てはまる」をまとめ、「当てはまる」とした。

データ処理には、Microsoft Excel for Mac 2011バージョン 14.5.8 を使用し、記述統計量を算出した。

結 果

719 施設のうち、老健 164 施設、特養 70 施設、合計 234 施設から回答が得られた（回収率 32.5%）。必要事項に記入漏れがあった 11 施設を除く 223 施設を分析の対象とした。

1. 園芸活動を実施している施設数と実施していない施設の非実施の理由

園芸活動を実施している施設は 106 施設（47.5%）であった。実施していない施設における非実施の理由は、「スタッフ数が足りない」、「他の活動で毎日忙しい」が多かった（第 1 表）。

Table 1. The reason that the elderly facilities have difficulty in horticultural activities.

第 1 表. 高齢者施設における園芸活動非実施の理由。

理由	施設数
スタッフ数が足りない	64
他の活動で毎日忙しい	46
園芸活動ができる対象者がいない	42
園芸活動をする場所がない	37
転倒やけがのリスクがある	19
園芸活動のための予算がない	7
用具の取り扱いの危険性がある	5
失敗体験により負の影響を及ぼす恐れがある	2
他部門や施設から理解が得られない	1

² 重複回答あり

2. 園芸活動の実施状況

園芸活動を実施している施設においては、園芸活動を開始して 5 年以内の施設が 61.3% と多かった。参加者は 2～5 名と少人数で 1 時間以内の活動を行っている状況だった。園芸活動の開催は不定期実施が 47.1% だった（第 2 表）。

3. 園芸活動の内容

園芸活動の内容は、プランター（ボックス）を利用した園芸活動、生け花活動、花壇での園芸活動、園芸作物の収穫物を利用した料理活動、森林浴的な効用を念頭に置いたミニ旅行・ミニ散歩活動の順に多かった（第 3 表）。

4. 園芸活動で用いる植物

半数以上の施設が、花や野菜を用いていた。盆栽や稲・麦はほとんどの施設で実施されていなかった（第 3 表）。

Table 2. Current status of horticultural activities in elderly facilities.

第 2 表. 高齢者施設における園芸活動の実施状況。

項目	施設数	(%)
活動年数 (n=106)		
1年未満	11	10.4
1～5年	54	50.9
6～10年	24	22.6
11～20年	14	13.2
21年以上	1	0.9
不明	2	1.9
活動への参加人数 (n=106)		
個別	13	12.3
2～5名	61	57.5
6～10名	24	22.6
11～20名	5	4.7
21～30名	2	1.9
31名以上	1	0.9
1回の活動時間 (n=106)		
30分未満	52	49.1
31～60分	43	40.6
61～120分	11	10.4
1ヶ月における実施頻度 (n=104)		
1回	16	15.4
2～3回	27	26.0
4回以上	12	11.5
不定期	49	47.1
園芸活動に関わる施設内・外のスタッフ		
施設内スタッフ(重複回答あり)		
介護職員	90	
作業療法士	24	
理学療法士	15	
園芸療法士	3	
その他	43	
施設外スタッフ(重複回答あり)		
地域ボランティア	23	
学生	4	
作業療法士	1	
園芸療法士	1	
介護職員	1	
その他	4	

Table 3. Horticultural activities of contents and plants in elderly facilities.

第 3 表. 高齢者施設で実施している園芸活動の内容と用いる植物。

内容	行っている (%)	あまり行っていない (%)	全く行っていない (%)
プランター(ボックス)を利用した園芸活動	54.3	38.1	7.6
生け花活動	46.6	23.3	30.2
花壇での園芸活動	33.3	46.7	20.0
園芸作物の収穫物を利用した料理活動	26.7	45.7	27.6
森林浴的な効用を念頭に置いたミニ旅行・ミニ散歩活動	24.5	28.3	47.2
畑での園芸活動	23.6	33.0	43.4
室内での園芸活動	15.2	29.5	55.2
園芸作物や収穫物を利用したクラフト作業活動	11.3	33.0	55.7
作業場での園芸活動	8.7	23.3	68.0
アロママッサージ、アロマテラピーなど植物由来成分を活用した活動	5.7	16.0	78.3
ハーブティーのための収穫、ティー作成、試飲などの活動	0.0	5.7	94.3
用いる植物	用いている (%)	あまり用いていない (%)	全く用いていない (%)
花	84.9	12.3	2.8
野菜	67.0	19.8	13.2
観葉植物	27.2	32.0	40.8
果樹	16.5	23.3	60.2
庭木	11.8	21.6	66.7
ハーブ	6.9	20.8	72.3
稲・麦	3.9	12.6	83.5
盆栽	1.9	10.7	87.4

5. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の対象者

「大切な作業をする機会がないような人」(作業剥奪)を対象としている施設、「心身に問題があって楽しめる活動に取り組めていない人」(作業疎外)を対象としている施設が多かった(第4表)。

6. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の目的

どの種類も目的として挙げたが、8割以上の施設は、作業不均衡(役割獲得, 日中活動量増加), 作業疎外(生きがい・趣味の獲得, 達成感を得る, 栽培や収穫を楽しむ), 作業剥奪(屋外で活動する機会を得る, 植物に触れる機会を提供する)を目的として捉えていた(第5表)。

Table 4. Subjects of horticultural activities classified based on the type of occupational dysfunction.

第4表. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の対象者.

作業機能障害の種類	施設数
大切な活動をする機会がないような人(作業剥奪)	55
心身に問題があって楽しめる活動に取り組めていない人(作業疎外)	53
生活のバランスが崩れている人(作業不均衡)	29
自分にとって価値のない活動しか行えていない人(作業周縁化)	16

² 重複回答あり

Table 5. The purpose and effect of horticultural activities classified based on the type of occupational dysfunction.

第5表. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の目的と効果.

目的	当てはまる(%)	あまり当てはまらない(%)	全く当てはまらない(%)
身体症状の改善	56.7	35.6	7.7
認知症状の安定	87.7	8.5	3.8
精神状態の安定	85.8	11.3	2.8
作業不均衡			
生活バランスを整える	66.0	28.3	5.7
役割獲得	83.8	10.5	5.7
日中活動量増加	83.0	13.2	3.8
作業疎外			
生きがい、趣味の獲得	94.3	3.8	1.9
達成感を得る	80.2	15.1	4.7
栽培や収穫を楽しむ	83.0	11.3	5.7
作業剥奪			
屋外で活動する機会を得る	83.0	14.2	2.8
植物に触れる機会を提供する	89.6	9.4	0.9
会話する機会を増やす	76.2	21.9	1.9
作業周縁化			
周囲に認めてもらう	54.3	36.2	9.5
周囲に関心を持ってもらう	42.5	39.6	17.9
周囲から感謝される	31.1	48.1	20.8
効果			
身体症状が改善した	22.6	66.0	11.3
認知症状が安定した	45.3	48.1	6.6
精神状態が安定した	49.1	45.3	5.7
作業不均衡			
生活バランスが整った	34.9	57.5	7.5
役割を獲得した	64.8	29.5	5.7
日中活動量が増加した	57.1	35.2	7.6
作業疎外			
生きがい、趣味を獲得した	68.9	27.4	3.8
達成感が得られた	69.5	25.7	4.8
栽培や収穫を楽しんだ	72.6	21.7	5.7
作業剥奪			
屋外で活動する機会を得た	71.2	25.0	3.8
植物に触れる機会を得た	93.4	4.7	1.9
会話する機会が増えた	66.0	30.2	3.8
作業周縁化			
周囲に認めてもらった	36.8	50.9	12.3
周囲に関心を持ってもらった	35.8	50.9	13.2
周囲から感謝された	33.0	51.9	15.1

7. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の効果

どの種類も効果として挙げたが、6割以上の施設は、作業不均衡（役割獲得）、作業疎外（生きがい・趣味を獲得した、達成感を得られた、栽培や収穫を楽しんだ）、作業剥奪（屋外で活動する機会を得た、植物に触れる機会を得た、会話する機会を増えた）を効果として捉えていた（第5表）。

8. 園芸活動の評価

評価を実施している施設は47.2%であった。評価内容は、個別に実施記録を書く、写真撮影、長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）、唾液アミラーゼ、生活行為向上マネジメント、興味関心チェックリスト、機能的自立度評価法（FIM）、筋力、関節可動域であった。評価を実施していない理由は、「評価の仕方がわからない」が26施設と多かった（第6表）。

Table 6. Reasons for not being evaluated.
第6表. 評価を実施していない理由.

理由	施設数
評価の方法がわからない	26
評価できるスタッフがない	18
効果を客観的に捉えることが難しい	17
対象者の参加が安定しない	17
評価する時間がない	13
実際に対象者の生活などに変化が見られない	7
その他	10

² 重複回答あり

9. 園芸活動に関わる施設内・外のスタッフ

施設内スタッフは、介護職員が最も多かった。施設外からは、地域ボランティアや学生が参加していた（第2表）。

考 察

1. 園芸活動の実施状況

園芸活動を実施している施設は47.5%で、園芸活動1回の活動時間は1時間以内で設定されていた。これは、藤田ら（2003）の報告と同様の結果であり、高齢者施設を対象としたことから高齢者の集中力や長時間作業による身体への負担を考慮した結果と考えられる。さらに、活動の人数が2～5人と少人数であるのは、1回の園芸活動で支援可能な職員数や日常業務との兼ね合いを考慮した結果と考えられる。園芸活動は介護職員を中心に、施設外からボランティアや学生を招いて実施している施設もあった。スタッフ数を補い、活動を継続するためには、施設外との連携が必要不可欠であると考えられる。活動年数は5年未満が多いのは、我が国の園芸療法の効果研究が10年ほど前に始まっ

た（小浦，2013）ことが関係すると考えられる。

一方、園芸活動を実施していない施設は、半数以上であり、スタッフ数の不足という理由が最も多かった。これは先行研究と同様の結果であり、藤田ら（2003）は、知識技術を持ち合わせた専門家がいない、活動を手伝うボランティア不足といった指導・援助者の問題が多いと報告している。また、対象者の問題、活動場所の問題、リスクの問題、予算の問題を多くの施設が抱えていることが明らかとなった。対象者の問題やリスクに関しては、園芸活動の内容とその適応を提示するなどの検討が必要であると考えられる。活動場所、予算に関しては、場所を選ばず低コストで実施可能な内容を提示していくことが必要と考える。

園芸活動で扱う植物や内容では、野菜や花が圧倒的に多く、プランターでの園芸活動や生け花を実施している施設が半数を超えていた。野菜や花は、普段の生活においても馴染み、屋内外どちらでも扱いやすく、植物の成長や季節感を感じる（小浦，2013）ことができる。さらに育てた野菜を収穫して調理して食べるという一連の流れを経験できる点で、楽しさを感じ、意欲を引き出すことにつながる。

2. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の対象者

作業機能障害のどの種類も対象者として当てはまると捉えられたが、多くの施設が、「大切な作業をする機会がない人」（作業剥奪）、「心身に問題があって楽しめる活動に取り組めていない人」（作業疎外）に園芸活動を実践していることが明らかとなった。施設利用者の生活は、起床、食事、入浴、就寝など時間が決められており、さらに環境面では利用者の心身機能の低下に対し活動範囲の狭小化などの制約が生じている。このような生活は、生活バランスは比較的安定しているようにみえるが、利用者自身の入所前のその人らしい生活を遂行することは困難となる。そのため施設職員は利用者が生活の中で意味を見いだせていないと感じやすくなる。その結果、多くの施設が作業剥奪や作業疎外を経験している利用者に対して園芸活動の必要性を感じ、提供したと思われる。しかしながら、京極（2010）は、作業機能障害は複数が重複して起こることも指摘しており、利用者個々の作業機能障害の種類を評価し、状態の絡み合いを考慮しながらそれぞれに応じた対応をしていくことが、今後必要と考える。

3. 作業機能障害の種類で分類した園芸活動の目的と効果

次に作業機能障害の種類で分類した園芸活動の目的と効果について考察する。

作業不均衡は、多くの施設が役割獲得および日中活動量の増加を目的に挙げていたものの、実際の効果は

6割程度であった。園芸活動参加時には、それぞれの参加者に役割が与えられ活動ができていたものの、日常生活にまで汎化される状態には至らなかったためと考える。

作業周縁化は、5割以下の施設でしか目的、効果として捉えていなかった。その理由として、結果より少人数での活動や不定期実施の施設が多く、他利用者や施設職員が園芸活動を実施したことを知らなかった、マンパワー不足で対象者に寄り添った十分な関わりができなかったという可能性が考えられる。そのため、施設外からのボランティアの支援や、他利用者同士がコミュニケーションを取れるような環境設定や活動提供を行うといった配慮が必要と考える。

作業疎外については、8割以上の施設が目的として捉えており、若干割合が下がるものの効果を感じていた。その手段として、多くの施設が花や野菜を栽培する園芸活動を採用していた。花や野菜の栽培は、高齢者にとって、「楽しかった」という感情の変化、生活の質などに効果があることがわかっている(豊田, 2010)。また園芸活動をする環境にいただけでも、穏やかな生命を感じることができるとされている(小浦, 2013)。そのため、生活に楽しみがない、気分が沈んでいる状態の作業疎外において、多くの施設は目的・効果を感じていたと考える。

作業剥奪は、7割以上の施設が目的として捉え、効果も6~9割の施設が感じられていた。施設は、変化の少ない生活がもたらす環境のため(井上, 2011)、様々な機会が得られにくいことが多い。対象となった施設では、少人数で短時間かつ、日常生活に馴染みのあるとされる花や野菜の栽培(松尾ら, 1997)を多く用いていた。これらは施設にとって手間をかけずに取り入れやすい作業であったと考える。そのため、屋外に出、植物に触れる機会を与えたという効果を引き出しやすかったと考える。

また、5割の施設は身体機能、8割の施設は認知、精神機能の改善や安定を目的として園芸活動を実施したが、効果を感じている施設はそれぞれ2割、4割と少なかった。これは、特養や老健を利用している者には、高齢で認知症や重度な方が多く、体調が変化しやすいため、機能改善につながらなかった可能性が考えられる。さらに本研究の結果から、改善や安定を認めるほどの回数が行えていない可能性も考えられる。

本研究の限界として、対象となった施設は岡山県、兵庫県の2県の老健と特養である。そのため、その結果を高齢者施設全体に一般化するには限界がある。しかしながら、作業機能障害の視点で実態調査をした研究は他にはなく、今後の園芸活動の活用や実践をしていく上で、意味のあるものだと考える。今後は、症例報告を通して園芸活動が作業機能障害に与える影響とその効果を検証していきたい。

摘 要

本研究では、作業機能障害の視点から、高齢者施設における園芸活動の実態調査を行った。アンケート用紙は、岡山県と兵庫県の719施設に郵送され、234施設から返信があり、223施設が分析対象となった。223施設の47.5%が少人数で1時間以内の活動を不定期で実施していることが明らかになった。園芸活動の内容は、プランター、生け花、花壇での園芸活動が多く、花や野菜が用いられていた。さらに、活動は、施設外からボランティアや学生の協力を得て実施されていた。園芸活動の効果は、47.2%で評価されていた。園芸活動を実施していない施設は、スタッフ不足、他の活動で忙しいが理由として挙げられた。

作業機能障害の種類で対象者を分類した結果、どの種類にあてはまる人も対象となっており、多くの施設は、作業剥奪、作業疎外の人を対象としていた。目的は、多くの施設が、作業疎外、作業不均衡、作業剥奪の改善や安定を挙げており、約半数が作業周縁化を挙げていた。効果は、作業剥奪、作業疎外の改善を挙げている施設が多かった。今後、症例報告を通して、園芸活動が作業機能障害に与える影響について検証していきたい。

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました施設の方々へ感謝申し上げます。本研究は、平成25年度文部科学省地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)「だれもが役割のある生きいきした地域の創成」の支援を受けています。

引用文献

- 井上資士・大町かおり・島田隆道・白鳥はづき・鈴木里絵・建木 健・中條由美子・林 悦子・林 玉子・原 和子・藤田さより. 2011. 園芸療法とリハビリテーション. p.11 エルゴ, 名古屋.
- 江口奈央・小浦誠吾・小川敬之・植松昌俊・江口喜久雄・田村沙耶花. 2013. 中等度から重度のアルツハイマー型認知症者のカイワレ大根の収穫とぬりえの作業遂行能力の比較. 作業療法ジャーナル 47: 178-185.
- 藤田政良・萩原 新. 2003. 長野県下の福祉施設および医療施設における農・園芸活動の実態と療法的活用に関する調査研究. 信州大学農学部 AFC 報告: 35-50.
- 柗崎京子・畠山千春. 2011. 身体障害のある施設利用者の生活ニーズ: 主観的ニーズからみた分析と実践への示唆. 社会福祉学 52: 121-135.

- Gary Kielhofner (山田孝監訳). 1999. 人間作業モデル. 理論と応用. 改訂第2版. pp. 327-333, 協同医書出版社. 東京.
- 兵庫県 高齢者施設一覧. 2014. 1. 6. (調べた日付).
https://web.pref.hyogo.lg.jp/hw18/hw18_000000099.html
- 公益社団法人 全国老人保健施設協会. 2014.1.6. (調べた日付).
<http://www.roken.or.jp/intro/>
- 小浦誠吾. 2013. 日本における園芸療法の現状と今後の可能性. 園芸学研究 12: 221-227.
- 厚生労働省ホームページ. 2016.1.6. (調べた日付).
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service13/dl/kekka-gaiyou.pdf>
- 京極 真. 2010. 作業療法士のための非構成的評価トレーニングブック 4条件メソッド. p32. 誠信書房. 東京.
- 増谷順子. 2012. 園芸活動における軽度～中等度の認知症高齢者の個人特性を生かした支援方法の検討. 日本認知症ケア学会誌 11: 576-589.
- 松尾英輔・藤木雄二・藤原勝紀. 1997. 福岡県内の福祉施設, 精神病院における園芸の療法的活用に関する調査研究: とくに精神薄弱者施設と精神病院について. 九大農学芸誌. 52: 11-20.
- 三宅優紀・京極 真・松田 勇. 2014. 我が国における高齢者に対する園芸療法実践の現状に関する文献研究. 吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要 15: 21-27.
- 岡山県 保健福祉施設・病院等一覧. 2014. 1. 6. (調べた日付).
<http://www.pref.okayama.jp/page/405431.html>
- 施設サービス等について. 2016. 1. 6. (調べた日付).
http://www.mhlw.go.jp/file.jsp?id=146267&name=2r98520000033t91_1.pdf
- 総務省統計局. 2016.1.6. (調べた日付). 高齢者の人口
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi900.htm>
- 高田艶子・岩永 誠. 2014. 補完代替医療としての音楽療法が認知症に及ぼす効果. 日本補完代替医療学会誌 11: 1348-792.
- 寺岡佐和・小西美智子・原田春美・小野ミツ・宮腰由紀子. 2012. 認知症高齢者を対象とした園芸活動が認知機能および心理社会的機能に及ぼす影響の検討. 広島大学保健学ジャーナル 11: 10-19.
- 寺岡 睦・京極 真・中山朋子・西本佳加・山崎信和・中村 Thomas 裕美. 2013. 作業機能障害の種類と評価 (Classification and assessment of Occupational Dysfunction; CAOD) の試作版作成. 総合リハ. 41: 75-47.
- 寺岡 睦・京極 真. 2014. 作業に根ざした実践と信念対立解明アプローチを統合した「作業に根ざした実践 2.0」の提案. 作業療法 33: 249-258.
- 東方和子・澤田みどり・生田純也・新野直明. 2010. 通所介護施設における虚弱な高齢者向け園芸活動プログラムの効果. 老年学雑誌 1: 29-38.
- 豊田正博. 2008. 高齢者を対象とした園芸療法実践的研究の課題－実施施設, 健康状態, 活動形態, 目標からの考察－. 人間・植物関係学会雑誌 7: 15-21.
- 豊田正博・牧村聡子・天野玉記・曾賀佐代子. 2010. 高齢者デイサービスの利用者を対象とした園芸療法の効果. 日本認知症ケア学会誌 9: 9-17.
- 横山章光. 2011. 認知症高齢者に対するアニマルセラピー. 老年精神医学雑誌 22: 16-21.